

C 環境世界の「身の廻り」的性格と現存在の空間性

- 現存在は内部性という空間にはいない
- 内部性→ある空間の中に客体的に存在すること：「それ自体延長させる存在者が〜」(p. 226.)
- 内=存在→一方が他方の中にある、といった客体的関係ではなく、世界に溶け込んでいようという実存範疇 (p. 133-4)
- 「空間がどのような意味で世界の構成契機であるのかを規定しなければならぬ」(p. 227.)
- 環境世界の「身の廻り」的性格は世界の世界性に規定されている (ハイデガーの主張)

第二節 世界の内部にある用具的存在者の空間性

- 用具的なものを性格づけるときにはすでにこの空間性に出会っている
- 「用具」はその定義に配視的「近さ」が含まれている；not 物理的な距離
- 道具は(…すため)の場所を持つている(独；Platz)
- 場所は道具連関の場所全体から規定されている
- 場所全般は方面(Gegend)と言われる。道具の所属すべき場。
- 場所；道具が配置されている特定の「そこ」や「あそこ」
- 「身の廻り」的性格；道具が占める場所が方面的に見当がつくものであることを指す
- まず空間があって、事物がある…ということではない
- 場所はすべて「日常的交渉の往来によって発見される」(p. 230.)
- 方面は「目立たなさ」という性格を帯びている
- この性格が目につくのは「配慮」の欠如の状態において
- 上記の方面が成り立つのも、「現存在自身がその世界=内=存在という点から〜」(p. 232.)
- 配慮する人間がいなければ空間はない

第三節 世界=内=存在の空間性

- 開離(Entfernung)と布置(Ausrichtung)
- 開離
- 能動的、他動詞的な意味で使用
- 「あるものの速さを取り消し、近づけること」(p. 233.)
- 現存在は道具を用意したりしながら存在者その近さへ出会わせて存在している
- 距離、遠近(Abstand)とは区別される
- 測定的には不安定だが、現存在には一貫して理解できる明確さを備えている (p. 234.)
- 測定可能な距離としての最短距離が配慮的には最も遠いこともよくある
- 遠近を第一義的に考えると「内=存在の根源的空間性は隠蔽されてしまう」(p. 237.)
- 「『気がする』ことのなかでこそ…世界が本当の姿で現前している」(p. 234.)；ハイデガーの世界観が端的に示されている
- 現存在が日常的に行う配視的な開離が自体存在を発見する
- p. 237はじめの文章の原文；Das umsichtige Ent-fernen (開離) der Alltäglichkeit des Daseins entdeckt (発見する) das An-sich-sein (自体存在) der »wahren Welt« (真実の世界), des Seienden, bei dem Dasein als existierendes je schon ist.
- 「真実の世界」とは？
- 開離のありさまにおいて現存在は空間的
- 間隔的に至近距離のものを素通りするものこの開離のせい

- 「環境的に身近かに存在しているものの近き速さについて決定をくだすのは、配視的配慮である」(p. 238.)
- 主観が〈ここ〉を決定し、〈ここ〉が起点となって近き速さを決定しているわけではない
- 「現存在は自分がいる〈ここ〉を環境的な〈あそこ〉をもとにして了解している」(p. 239.)
- 現存在は〈あそこ〉に居て、そこから自らの〈ここ〉へ立ち返る(同上)
- 自分を客観視することは違うのだからうけど…
- 現存在にできることは開離を変更することだけ

- 布置(『時間概念の歴史への序説』ではAusrichtungはOrientation(方向づけ)と重ねられて議論されているそうです)
- 配慮の配視によってみちびかれる
- おおまかにいうと布置は方向のことを指す
- 布置があつて左右という方向が生じる
- 左右は「主観的なもの」ではなく、「すでに現前している世界のなかで布置されていることの方向」(p. 241.)
- カントの左右観
- 右手と左手それぞれのへの感情の区別が必要
- 慣れ親しんだ部屋のなかではその部屋が暗闇でも、ある特定のものに触れれば部屋の方角がわかる
- カントに対するハイデガーの批判
- そもそも慣れ親しんだ部屋に存在しては、ある特定の事物に触れることができな(p. 241.)
- 左右が布置されることの根拠(構成的な条件)は、世界=内=存在していること (p. 242.)

第二四節 現存在の空間性と空間

- 現存在は開離と布置という形で空間的であるからこそ、用具的なものと出会うことができる
- 世界の世界性と共に開示されている空間には測量的で物理的な空間、いわゆる純粹な空間は少しも備わっていない
- 現存在がいてこそ空間があつて物理的な空間はその派生物なんだ！というハイデガーの主張
- 容致
- 道具をその空間性へ明け渡すこと
- p. 246の2段落目から始まる文章がハイデガーの空間論のまとめ
- 存在論的に正しく理解された「主観」——現存在が空間的
- 空間のアブリアオリ性
- つねにすでに空間に出会っている
- 純粹空間の捉えかた
- 配視から解放されて注視するだけの態度で空間を見たときに物理的な空間が発見される
- さまざまな方向を中性化
- 「身の廻り」性の喪失
- 空間は世界に立ち返ることで初めて理解できる

参考文献

山本英輔. (2012). 『存在と時間』における空間性の問題. 哲学・人間学論叢, 3, 63-75.

2497. シェーラー
「配世性」